蒼い獣

はなもげら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼い獣

【Ｎコード】
Ｎ９７５９Ｑ

【作者名】
はなもげら

【あらすじ】
世界三大強国大戦が終結を迎えた。

まあそんなことは置いといて、５０年ほど経った今現在。道無き道やら、茨の道やら、普通の道を妙な衣装で歩く、ちょっと近寄りがたいが見かけダンディーな中年がいた。

彼はあらゆる意味で各国に狙われる人物なのだが、等の本人は知

ったことかと切り捨てて、自由奔放、気の赴くままに一人旅を楽しんでいた。

そんな彼の波乱万丈な毎日をお送りするは私作者でございまする。

……は、さておき、香りに誘われ甘い蜜に酔いしれる彼の旅路をご覧あれ。

第壱章　飢えた獣

凡そ、１６０年も長く続いた世界三大強国大戦（略して三国戦）は、終戦１ヶ月前に急遽、帝国スカーレット、宗教国アクアマリン、王国バーントシェナーの三大強国の代表が集まり、これまた急遽和平条約を結び、呆気なく幕を閉じた。

狂喜狂乱、治安悪化、安堵に喪失、雨あられ。まあ、なんだかんだあれから５０年も経った。活気ついた市場や城下町。笑顔溢れる街道。路地裏に蔓延る裏の悪党（ゴミムシ）。エトセトラ、エトセトラ……。

長々と話したが、そんなことはどうでもいいのだ。気儘に旅するこの獣に、政治（オシゴト）の話は似合わない。今日も面白そう（厄介事）な匂いに釣られて赴くままに歩くのみだ。

「はてさて、今日は如何なる道楽が拙者を待ち受けているのやら」

飄々と抜かした笑顔には、獣が獲物を狙う獰猛さが隠れていた。能ある鷹は爪を隠すと言うが、有り余る力は隠しきれないのだろうか。彼の中の蒼い獣は、とてもとても飢えているようだ。

朝焼けに赤く燃える地平線に伸びる道を、一歩、また一歩と、波乱に身を引かれていく獣なのであった。

1　中年と少女（前書き）

中年と少女の出会いです。

今思えば、こんな駄文わ晒して良いのだろうか……

1　中年と少女

アカイ村は、帝国スカーレットの帝都ブルガリアから東にある辺境の町。辺境にしては、大きく人で賑わっていて、市場も有ったりする。市場は町を四分にするように、二本の道が町の中心で交差するような形。真上から見れば、町に大きなバツ印がみえるだろう。

「……」

そんな賑わいを見せる市場の一角に、目を据えた一風変わった服装の中年が座っていた。道の脇に転がる煉瓦を椅子変わりにして、市場にガンを飛ばしている姿は、犯罪者予備軍に見えるだろう。

事実、道の脇にいるとは言え、賑わう市場を見ている人達は、触らぬ仏はなんとやらとばかりに避けて通っていた。

それも、仕方ないと言える。彼の眼光は、人を射殺さんばかりの眼光を放っていた。危ない人の目である。まるで血に飢えた猛獣。蛙を睨む蛇。蛇を睨むスカンクである。

「……腹へった」

著者は読者様に大変失礼な事をした。彼は血に飢えた猛獣等ではなく、食に飢えたダメ男であった。そう言われれば、射殺さんばかりの眼光は、飢餓の余り助けを求める眼差しに見えなくもない。しかし、その事情を知らぬ民衆達は、関わりを持つまいと彼の前を足早に進んでいく。世の中それ程甘くはない。

だが、神は彼を見捨てなかったか、彼に近づく影が一つ。可憐な少女が、彼の前に現れた。背丈は恐らく彼の胸にも届かない。腰まで延びた金の滑らかな髪に、碧の瞳。ローブを羽織り腰の少し上に紐を巻きつけた服を着用していて、すらりとした身体付きに見えた。

中年は顔を上げると、麗しの美少女に鋭い眼差しを向ける。人を灰人にしかねない睨みを食らった美少女は、少したじろいだが、握り拳を作ると、背筋を伸ばして中年に己が指名を告げた。

「私は、辺境魔法騎士団長アルベ・ウォッカです。貴方には、不法に町へと侵入した容疑掛けられていますので、連行させて頂きます。抵抗すれば、それなりの処置を取らせて頂きますので、ご了承を」

「……ううむ」

どうやら、神は血も涙も無いようである。

余りの空腹のため抵抗も何もする気はない中年は、何処からともなく現れた騎士に、

あれよあれよと言う間に拘束される。まさか抵抗もないとは思っていなかったのか、中年が拘束される様子を少し訝しげに眺めるアルベ。その時、低い唸る音がアルベの耳に届き、音の現況が中年と分かると、彼女は全てを悟る。そして、近くにいた若い騎士に軽い食事を用意するよう言いつけ先に戻らせた。

（まあ、飯食わしてくれるならいいか）

実を言うと、逃げようと思えば逃げられる自信がある中年だが、飯をくれるなら連れていかれてやろうと、なんとも上から目線な考えをしていた。アルベ率いる魔法騎士一行その他容疑者一名は、民衆が避けて出来た道を進んでいくのであった。

煉瓦作りの壁は、明かりが無いためか威圧しているようだ。室内には、椅子が一組机を挟むように置いてあるだけ。どうやら取り調べ室のようだ。ある建物に連れて来られた中年は、屈強そうな騎士

にこの部屋に連れられると、待っているよう椅子に座らされた。どうやら、お偉い様が直々に取り調べをして下さるらしい。それを聞かされた中年は、喉の奥を鳴らした。笑っているようである。手枷をしているので危険は無いはずだが、なんとも不気味だ。
兵士もそう思ったのか、成るべく関わらないよう、見張りの兵士を一人残して直ぐに部屋を後にした。

数分後、暇を持て余した中年が奇行に出る。何を思ったか両手を左右に思いっきり引っ張った。その行動に、兵士は特に取り乱さない。それも魔法鉄のてかせだからである。
魔法鉄とは魔力を吸い上げる性質をもった鉄である。これを加工して出来た枷は、装着した者の魔力を常時吸い上げて、鉄の数十倍もの硬度を持続する性質をしている。魔法行使をさせず、さらに壊れないと優れものなのである。例え、戦時中最も活躍したと有名な帝国魔法騎士総長であるアーク・アルバレストでさえ、素手で壊す事は勿論、魔法を行使することすら敵わないのである。

ガギャン

「よし、これで楽になった」

軽々と手枷をぶち壊した中年は、瞬時に兵士の側へ飛んだ。
状況が処理できず硬直していた見張りの兵士は、対象が視界から消えたのにも気づく間も無く意識を手放した。　横たわった兵士の身ぐるみをひっ剥がすと、その身に纏い出した中年。兵士の着ていた鎧は、決して高価なものではないが複雑な作りをしているのだが、この中年、器用にするりと着替えてしまった。

「さて、俺の飯は何処やら」

待てばやって来るものを、態々問題を起こしてしまう中年は、酔狂なのか、バカなのか。全く、行動には何の意図もないのだろう。あるとすれば、やれ面白そうだの、やれ愉しくなりそうだだの、そういう男なのである。

やれやれ、とんだ男を主人公にしてしまったものだ。

兵士を気取ったにやけ顔の中年は盛大にくしゃみをした。

1　中年と少女（後書き）

読んで頂きありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9759q/

蒼い獣

2011年10月8日15時36分発行